

(1) 下田中学校

学校長 山沖 美保
校内研究代表者 和泉真智子

1. 研究主題

『個に応じた指導方法の工夫』
～全ての子どもの学力向上を目指して～

2. 主題設定の理由

本校の生徒は、小学校から同じ小集団の中で育ってきているため、自分自身の学力についても固定化して捉えており、学習に対する意欲が総じて低いことが大きな課題である。

また、ほとんどの生徒に表現力の弱さが見られるだけではなく、基礎・基本が十分に身につけておらず、個別支援が必要な生徒も各学年に数名在籍しているため、少人数ではあるが個に応じた指導方法の工夫が必要であることも日々の授業実践における課題である。

このような課題や実態を踏まえ、本年度は個に応じた指導方法を研究する取組を重点化し、全ての子どもが持っている能力を十分に伸ばすことができるような授業づくりを研究することにした。

具体的には、各種学力調査や定期テストの結果から、生徒の実態を十分に把握し、個々の生徒の課題を明確にしなが、一人一人が自分自身にあった学習方法や教材を選択できるような、個に応じたスモールステップの授業を進めていきたい。

加えて、一人一人が意欲的に学習に取り組める課題の設定・発問の工夫及び単元目標の達成に向けて、単元や内容のまとまりごとに学びを振り返る場面の効果的な設定の研究を通して、基礎学力の定着・表現力の向上を目指したい。

3. 研究の進め方と方法

研究授業では、研究テーマに迫るための授業づくりを研究する。校内研修において、指導案検討会、模擬授業、事後研修を推進し、全員で学びを共有し、課題克服に努める。

【教科間連携による授業力向上推進委員会】
(管理職、研究主任)

チーム会 (兼校内研)

構成メンバー

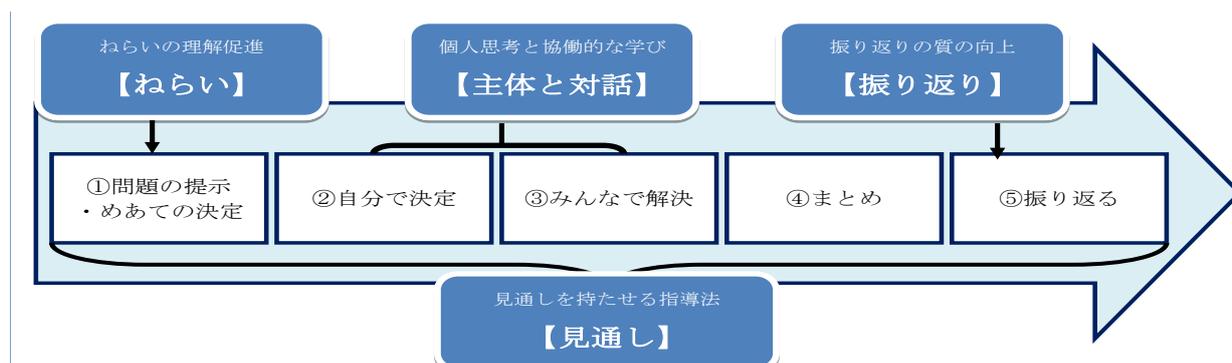
- | | |
|------------|-------------|
| ・国語担当 (宮本) | ・社会担当 (宮田) |
| ・英語担当 (稲田) | ・数学担当 (矢野川) |
| ・音楽担当 (和泉) | |

4. 研究内容 ～教科間連携による授業力向上の取り組みについて～

今年度は、昨年度の課題や生徒の実態を踏まえて、取り組み内容を見直しつつ、全ての子どもの学力向上をめざして、授業改善や授業力向上のための体制づくりが構築できるよう研究している。また、研究主題に迫るために、次のような研究仮説のもと、全ての子どもの学力向上を目指した授業づくりの実践を行ってきた。

- ①個に応じた学習方法・教材を可能な限り設定し、生徒が自分自身にあった繰り返し学習を行うことで、基礎的・基本的な知識・技能を習得することができるであろう。
- ②学ぶ意欲を高める主発問や課題設定の工夫を行うことで、表現力が高まるであろう。

これらの仮説から、今年度は、①基礎・基本の習得に結びつく効果的な繰り返し学習の設定、②学ぶ意欲を高める効果的な課題設定・発問の工夫、③下田の学びのスタイル（下図）の充実、の3つを具体的な研究内容とし、取組を継続してきた。



【教科間連携を中心とした研究サイクル】

(1) 授業研

参観者と授業者が協議等によって学びを深めるための研究授業を行っている。授業を参観する時には、参観シートを活用して授業を見取っている。また、参観シートには生徒のつぶやきや活動の様子を記入し協議時に活用している。研究授業は各学期に各自が1回ずつ行うこととし、全校研は、各学期一回ずつ授業を行った。

(2) 校内研修

①指導主事の講師招聘

講師を招聘した全校研としては、1学期は「個に応じた指導方法の工夫」という内容を西部教育事務所の指導主事を招聘し研修を行った。個別支援を効果的に行うためには、トレーニングによって習得する生徒もいるということを全員で共通認識することができた。また、授業の振り返りに、めあてに返って、認識させることが大事だということを学んだ。2学期には、「指導と評価の一体化」について研修を深め、能力ベースの授業を行うためには、見方・考え方を位置付けた授業を計画することや、発問を考える時に、生徒が自分事として考えられるような問いであることが大切だということを学んだ。

②実践ミニレポート

各学期末に授業者の学びを深めるための自身の実践をまとめたレポートを作成し、総括校内研で全教員が発表し、成果のあった取組や課題の共有をする。レポートは「校内研の取組が授業改善・学力向上に効果があったのかどうか」を大きな視点として、基礎学力についての取組と、個別支援の方法について記入している。生徒の変容が目に見えるように成果物を添付することもある。

この取組は授業者に、自分の授業の振り返りを促すとともに、教員相互で学び合い、授業実践し、さらに授業改善を図ることを目的としているが、他の教員の発表内容（取組）を自身の授業に取り入れたり、その後の実践に活かしたりする等、より深い実践となっている。

具体的な取組

- ①基礎学力の定着のための個に応じた学習の実施
- ②めあて・ねらいにせまる中心発問（課題）の工夫
- ③表現力の向上につながる単元の終末の振り返りの工夫
- ④教員相互で学び合う研究授業の推進（学習指導案検討、模擬授業、研究授業、授業評価アンケート、事後検討会、実践レポート作成等）

また、根拠をもとに自分の考えを言えたり書けたりできるよう、発表や説明の仕方を身に付けるために、研究授業の中で必ずペア学習の場面を設定することを全体で確認した。

5. 今年度の成果と課題

個に応じた指導方法の工夫という研究主題で、授業改善に向けた取り組みを実施することができた。学期に1回全教員が授業研究をするために、2週間前には指導案検討会を行い、教師が生徒役となり模擬授業を行うことで、教科の枠を超えた新しい意見も聞くことができた。そのことで生徒の興味や関心を引く課題設定や発問の工夫ができていたように思う。時には、思うような反応が得られず、後の協議で課題や反省点として挙げられることもあったが、授業者だけでなく参加した全教員が自分の授業改善のために活かすことができていた。また、違う教科でありながら関連性のある教科同士の助言を授業で活かすことができるなど、教科間連携の良さがみられた。

また、今年度は校内研修の中に必ず生徒の情報交換を取り入れ、一人一人の小さな変容を全体で共有することができた。昨年度までは家庭学習の提出に課題があった生徒が今年度になって徐々に提出することができるようになり家庭での学習が定着してきたことで、授業への意欲も出てきて前向きに取り組むことができるようになった生徒も見られた。

加えて、授業研究の中で振り返りの大切さについても協議を行い、その時間に身に付けたい力とは何かということを確認したうえで授業を組み立てることが、学力の定着につながるということを共通理解した。すぐに大きな変化はなくても少しずつ生徒自身が学力向上に向けての意識も高まってきている。

研究授業を通して課題を共通認識し、研究主題である「個に応じた指導方法の工夫」というテーマのもと各教科で取り組んでいることを研究協議時に具体的に発表してもらうことで、各教諭が自分の授業で参考にすることができたのではないだろうか。

最後に、各種学力テスト等の結果分析を行う中で、自分の考えや感想を書く問題が苦手な生徒や、数学的な表現を用いて表現することに課題がある生徒が多く見られた。そのため、生徒一人ひとりの課題を克服するための具体的な手立てを共有し、個別支援の充実を図りたい。

今後も生徒の実態に応じた授業改善を通して、生徒の学力向上が図れるよう校内研究体制を整えていきたい。